

戦後の日韓外来語の通時的対照研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黄,秀智 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000365

明治大学大学院国際日本学研究科

2023年度

博士学位請求論文

(要約)

戦後の日韓外来語の通時的対照研究

A Diachronic Contrastive Study of Postwar
Japanese and Korean Loanwords

学位請求者 国際日本学専攻

黄 秀智

• 博士学位請求論文の構成

1章 先行研究のまとめと研究課題の設定

- 1.1 本研究の問題意識
- 1.2 先行研究
- 1.3 現状の整理
- 1.4 本研究の目的と課題

2章 日韓新聞コーパス作成と

外来語の語彙調査の手順

- 2.1 日韓のコーパスの現状
- 2.2 新聞コーパス作成における
先行研究の概要
- 2.3 本研究で作成する戦後の新聞データ
- 2.4 2000年以降の日本新聞コーパスの作成
- 2.5 韓国新聞コーパスの作成
- 2.6 語彙分析方法

3章 現代の日韓外来語の特徴

- 3.1 本章の目的
- 3.2 外来語の出現率の比較
- 3.3 高頻度外来語の意味分野の調査
- 3.4 抽象的な意味分野の高頻度外来語
- 3.5 ランクの違いによる類型化
- 3.6 類型別に見る日韓外来語の特徴
- 3.7 まとめ

4章 日韓外来語の量的推移

- 4.1 日韓外来語の量的推移をとらえる観点
- 4.2 外来語の出現率の通時的な比較
- 4.3 日韓外来語の量的推移比較
- 4.4 日韓の外来語受容の歴史的背景とその違い
- 4.5 まとめ

5章 増加傾向から見た日韓外来語の特徴

- 5.1 本章の目的
- 5.2 増加傾向係数の算出
- 5.3 外来語の増加傾向とその意味分野
- 5.4 増加傾向から見た日韓外来語の比較分析
- 5.5 まとめ

6章 類義語と品詞の観点から見た

日韓外来語の特徴

- 6.1 本章の目的
- 6.2 類義語との関係
- 6.3 品詞の特徴
- 6.4 まとめ

7章 終章

- 7.1 各章のまとめ
- 7.2 結論
- 7.3 今後の課題と展望

謝辞

参考文献

附録-語彙表

• 各章の要約

1章 先行研究のまとめと研究課題の設定

- 1.1 本研究の問題意識
- 1.2 先行研究
- 1.3 現状の整理

近年、日本と韓国では、技術進歩、経済発展、国際的な交流の増加に伴い、外来語が急速に増加している。日常生活においてはもちろんのこと、テクノロジー、ファッション、食文化といった多岐にわたる領域で外来語の影響がみられる。日本と韓国は地理的にも文化的にも近い関係にあり、西洋から外国語を受け入れ、本国語として使用するという多くの歴史的共通点を持っている。しかし、これらの類似性にもかかわらず、日本語と韓国語の間で外来語の使用率には差があることが言われており、その使用に関しても違いが観察される。例として、日本では、「デパートメントスト

ア) 「コンビニエンスストア」「トイレ」といった英語由来の外来語が日常用語として定着しているのに対し、韓国では同等の概念に対して漢語や固有語を用いることが多い(例:百貨店、便宜店、化粧室)。また、日本では外来語が一般的な言語使用において抽象的な概念を持つ語彙として浸透しているのに対し、韓国語においては、このような傾向がそれほど強くない可能性がある。

このような現象は、単純な両国の受容態度の違いの結果だけではなく、言語内的な進化や言語体系における外来語の統合過程の違いによるものかもしれない。受容態度は、確かに外来語の増加に影響を与える一因であるが、それは一部の説明に過ぎない。外来語の使用の差や使用有無の差などの多様な差異は、その他多くの要素、例えば、如何なる外来語が量的にどのように変化してきたのか、両国においてどのような外来語を主に使用しており、文章中でどのような役割を担っているのかといった多くの要素にも影響される。しかし、日本語と韓国語の外来語においてどのような差異が存在し、なぜ生じているのかについてはまだ十分に解明されていない。

日本語における外来語の研究は、多様なメディアを利用して行われており、公的なメディアを基にした長期的な量的推移の分析や外来語と既存語の意味関係の研究が存在する。一方、韓国語の外来語研究は、資料のデジタル化の遅れと社会的な事情による研究の空白の影響を受け、語彙調査の拡充が1990年代以降に行われている。この結果、韓国語の研究は日本語のそれに比べてまだ充分ではないとされている。現代の日韓外来語の対照研究がいくつか行われ、言語間の相違や特徴は明らかにされているものの、時間的な変遷を追う通時的な研究はデータの不備により不足している状況である。

1.4 本研究の目的と課題

本研究は、日本語と韓国語における外来語の使用の相違を量的および質的な側面から検証し、それらが言語体系内でどのように使用され、どのような相違が見られるのか、また、それらの相違がなぜ生じるのかについて考察することを目指す。日本語と韓国語の新聞コーパスに基づく計量的な分析を行うことで、両言語間の外来語の量的変遷とその差異を解明することと、新聞で見られる外来語の意味用法の比較分析を行い、日韓外来語の特徴を考察することを目的とした。この目的を達成するために、以下の課題を設定し、研究を進めた。

第一に、データベースの作成を行う。韓国語の場合は戦後直後からの外来語の変遷を確認するため、1945年から2015年にかけての韓国新聞データを収集・整理する。一方、日本語の場合は、先行研究における1950年から2000年までのデータに基づき、引き続き言語特徴を把握する目的で、2000年から2020年までの日本新聞データを収集する。データベースの作成方法については、第2章で詳述する。

第二に、量的分析を実施する。収集したデータセットを基に、外来語の出現率を計算し、20世紀後半と現代に区分して、その推移と特徴を分析する。現代に関しては、データベースを用いて日韓の外来語出現率を比較し、差異を明らかにする。この分析については、第3章で論じる。20世紀後半に関しては、金(2011)の研究結果と比較し、時間を通じた推移を明らかにするが、この内容は第4章で論じる。

第三に、相違点を特定する。現代の分析では、外来語の意味分野ごとのランク付けによる分類を行い、日韓の頻度の違いに基づいた類型化を行った。この分析は第 3 章で扱う。20 世紀後半の分析では、「増加傾向係数」を用いて外来語の使用傾向の差異を数値的に比較し、結果を先行研究の成果と対照する。この分析は第 5 章で論じる。

第四に、類義語との関係や品詞に関するデータを詳細に分析し、日韓の外来語に見られる相違の特徴を明らかにする。これには、類義語の比較や言語使用における品詞の動向の分析が含まれる。この内容は第 6 章で論じる。

2 章 日韓新聞コーパス作成と外来語の語彙調査の手順

第 2 章では、①両言語間の外来語の量的変遷とその差異を解明する、②新聞で見られる外来語の意味用法の比較分析を行い日韓外来語の特徴を考察するとの目的を達成するための日韓新聞コーパスの作成方法や外来語の語彙調査の手順を紹介した。本研究では、10 年刻みの 1950 年から 2000 年までの毎日新聞を用いて日本語の外来語の基本語化について明らかにした金（2011）の研究方法に倣い、10 年刻みで 1945 年から 2015 年までの韓国新聞『東亜日報』コーパスを構築した。さらに、『毎日新聞 CD データ集』を用いて 2000 年から 2020 年までのコーパスを作成し、日本語は 1950 年から 2020 年まで、韓国語は 1945 年から 2015 年までを分析対象として定めた。この過程で、両コーパスの設計から資料の連続性、構築方法、データの整備に至るまでの詳細を第 2 章で記述した。また、量的変遷分析に必要なテキスト前処理や外来語の抽出方法、さらに日韓の外来語特徴の用例分析手法についても触れる。

3 章 現代の日韓外来語の特徴

3.1 本章の目的

第 3 章では、最近の 20 年（日本語は 2000 年から 2020 年まで、韓国語は 1995 年から 2015 年まで）を現代と定義し、現代日本語と韓国語における外来語の言語特徴に焦点を当てる。使用率やその意味分野を中心に分析し、両言語でどのような単語が用いられているのか、また、それらにどのような違いがあるのかを詳細に分析する。こうしたアプローチを通じて、現代日本語と韓国語の外来語使用の相違点を把握し、その特徴を明らかにすることを本章の目的とする。

3.2 外来語の出現率の比較

本節の分析対象であるデータは、日本語は、『毎日新聞』の 2000 年、2010 年、2020 年の 3 カ年であり、韓国語は、『東亜日報』の 1995 年、2005 年、2015 年の 3 カ年である。その年次別と 3 カ年合計の文字数や外来語の延べ語数・異なり語数、出現率を示した。その結果、新聞における日本語の外来語は、韓国語の外来語の 1.3 倍あり、日本語における外来語の使用が韓国語より高いことを観察した。

3.3 高頻度外来語の意味分野の調査 3.4 抽象的な意味分野の高頻度外来語

本節では、日本語と韓国語の高頻度の外来語を確認し、『分類語彙表』による意味分野の観点からその特徴を探る。高頻度外来語は、通年度数順に並べ、高い順で上位 200 語を指す。ここでは、ある程度使用されている外来語を比較分析するため、通年度数（各年出現度数合計）15 以上（平均して各

年 5 回以上)の語彙を対象とした。その結果、日本語と韓国語における上位 200 語の分析から日韓とも抽象的な意味分野の外来語が最も多く使用されていることを指摘した。しかし、『分類語彙表』で定義する意味分野からみると、日本語の場合は、「1.1 抽象的關係」と「1.3 人間活動」がほぼ同じ比率として使用されている一方、韓国語の場合は、「1.1 抽象的關係」より「1.3 人間活動」の意味分野が 2 倍程度多く使用されていることが明らかになった。また、その内容から日本語の方がより多様な分野で使用される外来語が多く、一方で韓国語ではより限定された分野での使用が目立つことがわかった。

3.5 ランクの違いによる類型化 3.6 類型別に見る日韓外来語の特徴

本節では、頻度による類型化から日韓間で外来語の使用頻度に相違が見られる類型の分析を行った。[日本語-高頻度(ab)・韓国語-低頻度(de)]、[日本語-低頻度(de)・韓国語-高頻度(ab)]、[一方にのみ出現]の類型の分析結果、日本語においては動詞性を持つ外来語が多く見られ、「する」を付けて動詞として活用される外来語が多いこと、また、韓国語においては、類義語との関係によって外来語の使用頻度が比較的に低いことが、日韓の言語使用における相違の特徴として指摘された。

3.7 まとめ

本章の分析結果、一点目として、新聞における日本語の外来語は、韓国語の外来語の 1.3 倍あり、日本語における外来語の使用が高いことが判明した。二点目に、意味分野の分析からは、日本語では「1.1 抽象的關係」や「1.3 人間活動」といった抽象的な意味を表す外来語が多く見られること、また、一つの外来語が名詞や動詞として使用される特徴が確認できた。韓国語では、抽象的な外来語の使用が多いものの「1.3 人間活動」を表す分野の語が多いこと、一つの外来語には一つの品詞を使用すること、類義語の関係により外来語の使用頻度が少ないという特徴が確認できた。

4. 日韓外来語の量的推移

4.1 日韓外来語の量的推移をとらえる観点

本章では、戦後から現代にかけての外来語の量的推移に注目し、その変動を詳細に分析することとする。さらに、先行研究で報告された外来語の使用と社会的背景との関連データを用い、これらのデータとの相互比較を通じて、日本語と韓国語における外来語の変遷を考察した。

4.2 外来語の出現率の通時的な比較 4.3 日韓外来語の量的推移比較

金 (2011) のデータと韓国新聞データ間に 5 年の差があるものの、それを考慮しつつ日韓のデータを年度に合わせて比較した結果、両国とも外来語の使用率は増加していることが確認できた。

具体的には、1950 年の日本語の外来語出現率 (1 万字当たりの出現率) は 74.06 と、韓国語の戦後直後の 7.69 との間に著しい差がある。韓国語の出現率が 1945 年から 1965 年にかけて 7.69 から 60.37 へと急増する一方で、それでも日本語の 1960 年の出現率である 135.53 には及ばない。更に、日本の 1950 年から 2020 年の出現率は 74.06 から 182.71 へ、韓国の 1945 年から 2005 年の出現率は 7.69 から 115.34 へと増加しており、日本語の外来語使用率は戦前から高かったのに対し、韓国語は戦後からその差を縮小し始めたと解釈できる。また、日本語で 1950 年から 1960 年に 1 次の急増、1991 年から 2000 年に 2 次の急増が観察される傾向は、韓国語でも類似している。韓国では、1945 年から 1965

年、および 1985 年から 1995 年の間に急増しており、この急増の年代は日韓ともほぼ同じである。そして、日本の 1960 年から 1991 年と韓国の 1965 年から 1985 年の「停滞期」の推移も共通している点が見受けられる。2 次の急増が見られる時期においては、日韓で相違が見られる。日本語の場合は、2000 年から 2010 年まで再び停滞期を迎えてから 2010 年から 2020 年に増加する傾向であるが、韓国語の場合は、1995 年以降 2015 年まで引き続き増加する傾向である点である。

4.4 日韓の外来語受容の歴史的背景とその違い

本節では、前節までの日韓の外来語の量的推移を考察する上で、既存の研究をまとめ、背景事情を説明した。日本では戦後、外来語、特に英語由来の言葉が広く受け入れられ、21 世紀に入ってから検討が始まるまでほぼ自由に使用されてきた。これに対し、韓国では民族意識の強さから外来語に対する抵抗があり、言語醇化運動が見られる。外来語受容の時期においても、韓国の西洋外来語受容は 1894 年の甲午改革以降であり、日本の 16 世紀半ばの南蛮貿易を通じたポルトガル語受容とは約 300 年の時差がある。戦時中の外来語制限や戦後の政策、社会的動向も両国の外来語使用率に影響を与えている。特に、1990 年以降のグローバル化や情報化の進展は外来語の使用増加に寄与しているが、日本語において、2000 年以降はその増加スピードが弱まり、外来語が「普通言葉」としての位置づけに変化している。韓国では 1995 年以降、グローバル化の影響で外来語が増加しているが、日本とは異なり、外来語の出現率は低いままである。これらの違いは、外来語受容の時期、戦争や政策の影響、言語に対する社会的態度や価値観の違いが反映されていると考えられる。

4.5 まとめ

本章では、戦後から現代にかけての外来語の量的推移を詳細に分析して、日韓外来語の量的推移には明確な時系列のパターンを確認した。また、今まで報告された韓国語の先行研究をまとめ、量的推移と照らし合わせることで、韓国語の外来語における背景を整理することができた。

日本では戦前から外来語の使用が多く、戦後から現代に至るまでその使用率は安定して増加している。一方、韓国では戦後から外来語の使用が急増し、経済発展に伴い使用率が高まったが、日本語の増加率には遅れており、現代でも日本に追いつくことはない。20 世紀後半の両国では外来語の急増期と停滞期が類似していたが、現代に入ると韓国語は増加を続ける一方で、日本語は一時的に停滞した後、再び増加傾向に転じた。

5. 増加傾向から見た日韓外来語の特徴

5.1 本章の目的

本章では、20 世紀後半、日本語では 1950 年から 2000 年、韓国語では 1945 年から 1995 年の各六つの年次を通じて日本語と韓国語の外来語使用の特徴に焦点をあてた分析を展開する。主な目的は、通時的な観点から日本語と韓国語における外来語の意味分野を詳細に把握し、20 世紀後半における両言語の外来語の特徴を明らかにすることにある。さらに、出現率の計算と増加傾向係数の算出を通じて、日韓の外来語の増加のパターンを分析し、その相違点を明確にすることを目指す。

5.2 増加傾向係数の算出 5.3 外来語の増加傾向とその意味分野

本節では、特徴的な単語を取り上げる方法の一つとして増加傾向を算出している、国立国語研究所(1987)や金(2011)を参考に、韓国語において特徴的な外来語を取り上げ日本語と比較するため、先行研究の方法に沿って、増加傾向係数を算出して分析を進めた。現代で確認できた抽象的な外来語の使用といった特徴が20世紀後半においても確認できるのか、なお、増加傾向の各区分にどのような意味分野の外来語が含まれており、それにはどういった日韓相違があるのかを把握するため、出現する外来語の意味分野を『分類語彙表』を用いて確認した結果、日韓とも戦後から現代に至るまで、抽象的な意味分野の外来語の使用が増加していることは同じであるが、日本語はより多様な分野の外来語の使用が多い一方、韓国語は、人間活動に関わる抽象的な外来語の使用が特徴的であることが分かった。

5.4 増加傾向からみた日韓外来語の比較分析

本節では、増加傾向係数を算出した外来語の中、「日本：増加－韓国：変化無し」「韓国：増加－日本：減少(やや減少)」「韓国：増加－日本：変化無し」の三つの点に焦点をあて、増減の差に伴う注目すべき点を検討することで外来語の特徴を把握した。その結果、韓国語において外来語受容の遅れや外来語より類義語を優先する傾向があることが明らかになった。特定の分野での韓国語の外来語の増加も確認されたが、日本語の外来語使用には目立った特徴は見られなかった。

5.5 まとめ

本章では、20世紀後半における韓国語の外来語の出現率と増加傾向係数を算出し、金(2011)の研究成果と比較分析を行った。本章では、日韓外来語の増加のパターンを分析し、その相違を明らかにするために、20世紀後半における外来語の増加傾向係数を用いて増減の差が見られる三つの分類の分析を通して、それぞれの特徴を確認した。

分析の結果、20世紀後半の日韓の新聞において外来語の使用は、共に抽象的な意味分野での増加が認められた。日本語においては、抽象的な意味を表す外来語の方が、具体的な意味を表すものより多いという傾向が見られる。一方、韓国語では、抽象的な意味分野の中でも「人間活動」を表す語が特に多いことや「1.1 抽象的關係」より「1.4 生産物・用具」の具体物の出現が多いという特徴が確認された。また、増加パターンを基準に、三つのグループに分けて12語を分析した結果、増加傾向係数の日韓比較分析からは、外来語の特徴を把握することはできなかったが、現代の分析と類似する傾向が見受けられた。

6. 類義語と品詞の観点から見た日韓外来語の特徴

6.1 本章の目的

本章では3章と5章で明らかになった現代の日韓外来語の相違と変遷を、類義語との関係と品詞特徴の2点に焦点を当てて深掘りし、各特徴ごとに語彙の変遷過程を詳細に分析・考察することである。これにより、日韓の外来語の特徴とその進化のパターンをより具体的に理解することを目指す。

6.2 類義語との関係

本節では類義語と外来語との関係について考察した。ここには、二つの特徴が存在するが、一つ目の特徴は、韓国語において「ケース」「スペース」「リード」「ムード」といった外来語が使用されているが、類義語を優先する傾向により、これらは低頻度の外来語に分類される点である。二つ目の特徴は、「サッカー」「バスケットボール」「コンビニ」「リストラ」「プレッシャー」といった用語が韓国語で外来語として受容されず、類義語の使用が継続されているため、韓国語で出現しない外来語である点である。これらの点について、外来語とその類義語を取り上げ、用例の前後項目を確認し、分析を進めた。

その結果、日本語の「ケース」は、類義語が存在するにもかかわらず、独自の地位を築き、その使用頻度を増している一方、韓国語の「케이스(ケース)」は、1965年に一時的な使用増加が見られたものの、類義語との用法や形式における役割分担が固定化せず、結果として日本語とは対照的に低頻度の語としての位置を確保していると考えられる。また、「スペース」の分析から、日本語における「スペース」は類義語である「空間」の意味の一部を担当する役割を果たし、外来語として日本語に定着し、安定して使用されていると言える。一方、韓国語においては、一時期は用例が確認できるものの、その使用率が増えていくことはできず、「공간(空間)」との意味用法における役割分担も確立されておらず、外来語としてその勢力を確保することはできなかった。そのため、現代においては、特定の文脈における複合語形式のみに限定して使用される傾向が確認された。さらに、日本語は、外来語と類義語との間で意味分担が生じたり、言い換えが生じ外来語の頻度が高くなる場合が多い一方、韓国語は外来語を受け入れない可能性や外来語よりも類義語を重視する傾向が強いと言える。

6.3 品詞の特徴

本節では品詞の特徴に焦点を当てて分析を行う。日韓とも高頻度の語である「イメージ」と日韓で頻度の差が見られる「アピール」「スタート」に注目して、品詞の観点から分析を進める。日韓比較分析では、日本語の「する」と共起する「する動詞」としての用例と、韓国語の場合は、「外来語+하다(hada)」と共起する「하다(hada)動詞」としての用例を収集し、名詞用法と動詞用法といった品詞使用の違いを中心に分析を進めた。

その結果、「アピール」では、日韓とも使用されている意味に動詞的性格があるにもかかわらず、日本語では名詞と動詞の両方として使用されることが多く、韓国語では、そもそも使用頻度が非常に少なく、出現する全ての用例が動詞の形で使用されるという特徴が確認できた。また、「スタート」では、日本語における「スタート」の使用用法を考察すると、主に「スタート」の名詞的用法の使用が多いが、「スタートする」といった動詞的用法の使用も多いことが確認できたが、韓国語における「스타트(スタート)」の使用は、新聞の中における使用頻度が非常に少なく、使用されている用法をみると、ほとんどの用例が「스타트(スタート)」の名詞的用法として使用され、日本語に比べて限定的であり、特にスポーツ関連の記事でのみ使用されるという特徴があることが分かった。最後に、「イメージ」は、日本語における「イメージ」は、基本的には名詞用法として使用されるが、「イメージする」の動詞用法に「思い描いて表現した結果」という意味用法を付与して、両方使用

されているが、韓国語の「이미지(イメージ)」は名詞用法のみであり、単独で「하다(HADA)」と結合して動詞的に活用することは難しい。動詞的性質を持たせる場合は、「화(化)」などの接尾辞を用いるが、新聞の用例ではこのような動詞用法の使用は稀であることが分かった。

6.4 まとめ

本章では、3章および5章で観察された日韓の外来語の特徴を類義語との関連性と品詞の特徴の二つの観点で分析し、戦後から現代に至る推移と用例を具体的に検証した。

この分析により、日本語においては、外来語が類義語と意味の分担をしながらも、外来語としての地位を保持し、言語内で定着していく過程が確認された。対照的に韓国語では、外来語が一時的に使用される場合があるものの、結局は類義語が優先され、その使用が類義語へと回帰する傾向が見られた。さらに、品詞に関して、日韓の外来語使用には顕著な差異が存在する。韓国語の外来語は限定された意味や文脈で使用されることが多く、動詞化することは困難であり、主に一つの品詞形態で使用される。それに対して日本語では、外来語がより広い意味で用いられ、動詞化を含む複数の品詞に渡ってその使用が可能であることが明らかになった。

7章 終章

7.1 各章のまとめ 7.2 結論

この研究は、日本語と韓国語の新聞を通じて外来語の使用とその変遷を量的に分析し、言語間の使用頻度の差異と言語特徴を明らかにすることを目指し、以下のような結果を得た。

まず、量的差異について、1945年から2020年間の日韓新聞データを基に、外来語の出現率とその推移を比較した。韓国語の外来語は、日本語を追いかけながら増加しているが、現代の新聞では日本語の外来語の使用率が韓国語より1.3倍弱多いことが確認された。この量的差異の背景として、社会的背景としては、外来語の受容が日本よりも韓国で遅れている点、韓国の言語醇化運動の影響、および外来語に対する異なる社会的態度が挙げられる。

言語特徴においては、日本語の新聞では外来語が広い分野で使用され、抽象的な意味分野においても多様な用法が見られる。これに対して、韓国語では外来語の使用が人間活動に関連する限られた分野に集中している。さらに、日本語における外来語は、類義語の意味の一部を担い、その勢力を拡張していくが、韓国語では一時期外来語を使用するとしても、類義語に回帰する傾向が見られる。また、日本語では一つの外来語が名詞、動詞など複数の品詞で使用されるのに対して、韓国語では一つの外来語が単一品詞としてのみ使用される傾向がある。このため、韓国語における外来語の使用は日本語に比べて拡張性が乏しく、より限定的であると言える。

日本語においては、抽象的な関係や人間活動に関連する外来語が広範囲にわたり使用されており、複数の品詞としての役割を果たす柔軟性がある。このような使用の自由度が、外来語が日本語内で高頻度で使用され、さらに増加する傾向にある理由の一部を説明している。対照的に、韓国語では外来語へのアプローチが比較的閉鎖的であり、外来語に割り当てられる役割が限定されているため、その使用率は日本語に比べ低い。今後もこの傾向が続くと考えられる。現代韓国語における外来語の増加傾向は確認できるが、上述のような日本語の外来語の受容時期の早さ、韓国語における国語

醇化運動の積極的な展開などの社会的背景、そして日本語の外来語に見られる拡張性や使用の自由度などの言語特徴を考慮すると、日本語の外来語の使用率は今後も韓国語より高い位置を占めると予想される。

この研究は、日韓の新聞を通じて外来語の使用とその変遷を量的に分析し、言語間の使用頻度の差異と特徴を明らかにした。1945年から2020年間の新聞データを基にした分析では、韓国語の外来語使用量が増加しているものの、日本語に比べて約1.3倍弱低いことが確認された。この差異の背景には、韓国における外来語受容の遅れや言語醇化運動、外来語に対する社会的態度が関係している。

外来語の特徴において、日本語では外来語が広範囲にわたる分野で使用され、抽象的な意味分野においても多様な用法が見られる。一方、韓国語では外来語の使用が人間活動に関連する限られた分野に集中しており、類義語を優先する特徴が顕著である。さらに、日本語における外来語は、類義語の意味の一部を担い、その勢力を拡張していくが、韓国語では一時期外来語を使用するとしても、類義語に回帰する傾向が見られる。また、日本語では外来語が名詞や動詞として使用されるのに対して、韓国語では一つの外来語が単一品詞としてのみ使用される傾向がある。このため、韓国語の外来語使用は日本語に比べて拡張性が乏しく、限定的であると言える。

今後の研究では、戦前から現代に至るより長期間にわたる推移の調査や、類義語と外来語の意味分担の具体的な分析、日韓での外来語の受容や定着の仕方、現代における外来語の処理方法など、社会全体の認識の比較分析を通じて、より広範囲かつ深遠な言語変化の理解を目指すことが求められる。

7.3 今後の課題と展望

今後の課題には以下の4点を挙げた。

- ① 調査範囲の拡大（20世紀後半の日本の新聞コーパスを作成し、それを基にして日本語と韓国語の外来語の言語特徴の比較分析をさらに進める・戦前のデータも収集し、より長期にわたる日韓外来語の量的推移を解明する）
- ② 社会的背景の分析（外来語使用に影響を与える要因は多岐にわたる。そのため、言語特徴のみならず、社会的背景すなわち国語政策の観点の違いや外来語に対する意識の差異を詳しく分析し、日韓での外来語の受容や定着の仕方、現代における外来語の処理方法など、社会全体の認識を比較分析することが必要である）
- ③ 分析対象語彙の増量(1)
類義語と外来語の意味分担が具体的にどのように行われているかについて詳細な分析を行うためには、現在の研究で取り上げた「ケース」や「スペース」などの外来語に加え、より多くの外来語を分析対象にすることが今後の課題として挙げられる。
- ④ 分析対象語彙の増量(2)
「する」を付加することによる動詞化に限定して分析を行ったが、外来語は名詞にとどまらず、形容詞や動詞など、より多様な品詞にわたって存在する。これら各品詞が持つ意味用法や、日韓間での使用における相違点についての詳細な分析が必要である。

附録 語彙表

3章での現代日韓外来語—上位 200 語リストや 現代日韓外来語—類型別語彙リスト、5章での韓国語の増加傾向係数順の外来語リストを附録として掲載する。